資料

郷土話方資料（2）

―今から七十年前 昭和七年十二月十日 佐伯尋常高等小学校

紹介者　山本　保
（会員　佐伯市池船町）

(二)　千代鶴君の死

一本杉で名高い、堅田・西野村の村はづれのたんぼの中に、小さいほこらが淋しく、建っています。

その中には、ほこら一ぱいある、大きな岩がお祭りされて、錆びた鎗だの、刀などが上げられています。見ただけでも、何だかわけのありさうな岩、この岩については、かなしい物語が、つたへられてゐます。

丁度、今から四百年ばかり前、佐伯の殿様に、佐伯惟治という大将がありました。

大分に、大友義鑑といふ殿様がゐて、豊後の国を一手ににぎり、勢力を四隣にふるってゐました。

此の大友がちょっとした考へちがひから、臼杵の近江守長景に命じて、佐伯氏を攻めた時のことです。

長景は、総勢二万ばかり引きつれて、大永七年（一五二七）正月、鶴岡の栂牟礼（とがむれ）に、攻めよせました。戦ははげしくありましたが、佐伯氏が、なかなかよく防いで、一向落城しません。

そこで、長景は悪ぢえを出して、佐伯方に仲なほりを申し出ました。

「私は、主人の言ひつけで、貴殿を攻めに来ました。わけも調べずに、攻めたのは手落ちでした。

よくよく聞いて見ますと、あなたは、主人義鑑公にむ

ほんをするやうな心は、露ほども無い事がわかり、此の上は、ろう城をやめて、日向の方へ遠慮しなさい。そうすれば、主人に申上げて、きっと佐伯氏が立派に立つやうにしてあげます。」

と起請文をよこしました。

そこで、だまされるとは知らず、惟治公は、二十人余りの家来をつれて、日向国・三河内といふところに落ることになりました。

惟治公には、千代鶴君と云って、やう〳〵八つになる若君がありました。

母がないので、一層かあいがってゐましたが、いよいよ、城を出ることになると、千代鶴君をそばへ呼んで、

「おまへも、一しょに連れて行きたいが、父はすぐ帰って来るから、おとなしく待っておいで。大将になるものは、人に笑はれるやうな遊びをしてはなりません。」

と涙ながらに、やさしく言ひきかせ、家来をつれて、堅田村に身をかくさせました。

親子は、かなしい別れでした。

之が、永の別れになるとは、誰も思ひませんでした。

かうして、長景はうまくだまして、まんまと城をのっとりました。

千代鶴君は、小さいので何も知りません。

「父にあいたい」と、毎日父を恋しがりました。

昨日までは、風にもあてず箸さえもたず、大事に〳〵育てられた身が、今日はかやぶき屋根で、寒さをしのぎ人に笑はれまいと、こっそり涙をふくのを見ては、可愛そうでなりません。

家来は見かねて、相談の上、三河内（宮崎県北浦村）へ出発することになりました。

やう〳〵西野村まで来て、一休みしているところへ、向ふからかけつけて来る武士があります。よく見ると、それは、惟治公の家来で「惟治公が三河内で、名もなき者にころされた」ことを知らせる使いものでした。

皆は、かなしみましたが、仕方がありません。

長景の仕方をうらみもし、後悔もしましたが、今はどうにもなりません。

一層の事、四国へ渡って身をかくし、時期を見て、お家再興をしようと言うことに、相談がきまりました。

丁度、その時、これは又どうした事でせう。
鎧を着た武士が、駒をとばして、真一文字にはせて来ます。
「そこにおいでになられるは、千代鶴君ではありませぬか」と大音声に呼び立てます。
さては、敵にちがひないと、家来達はさわぎましたが若君をかくすひまも、ありませんでした。
もう、これまでと覚悟をきめました。
「人手にかかって、死ぬのは恥だ」と、けなげなる八つの千代鶴君は、大きな岩にうちまたがって、自害しました。家来たちも、追い腹を切って死にました。
はせつけた武士は、誰でしよう。
それは、佐伯氏のうたがひはれて、許しを知らせる使の者であったことが、後でわかりました。
千代鶴君の自害した岩は、尚ほこらの中にまつられてこの物語を、語るかのようです。

川名のルーツ

◆久住川　久住山に発し、久住高原、久住町を通る。クジュウはクシフルから出たといわれ、久住山を中心とする九重(くじゅう)山群は九州の屋根を形成する。

◆奥岳川　祖母(そぼ)・傾(かたむき)山群に発する。九州山地の一中心地として山深いところ。人里からみてまさしく奥の方にある山岳地帯であり、古くから奥岳と呼ばれる。

◆奥畑川　奥畑は川沿いに旗返峠の道が通ずるところで、三重町中心部から牟田町へ越す山の奥にある。文字通り奥の方にある畑地だろう。ハタは端かもしれない。

◆由布川　由布岳に発する。由布岳は古く木綿山と書き、「豊後風土記」はふもとの盆地名起源について「この郷は栲(たく)の木が多く、つねに木綿(ゆふ)につくる」と書いている。(栲はコウゾの古名)

◆玖珠川　玖珠郡の中央を流れる。「豊後風土記」に「この村に洪(おお)きなる樟(くす)の樹あり。よりて球珠郡という」とあり、その切り株だという山が玖珠盆地にある。九重(くじゅう)山群も近いので、クジュウ、クシフルの同語源説や、クスをクズ(国樔・国主など)と考える先住民説がある。

◆三隈川　筑後川上流。大山川、玖珠川が合流するところから、日田(ひた)盆地を流れて福岡県境の夜明(よあけ)ダムまでを三隈川と呼ぶ。水郷日田温泉の中心となる川。盆地はかつて湖で、西の山を破って水が去ったあと、盆地となって日隈(ひのくま)、月隈(つきくま)、星隈(ほしくま)の三丘が残る。このため三隈といわれたらしい。「豊後風土記」などは日田川とし、年魚(あゆ)が多いと紹介している。いまもアユは多く、鵜飼が名物である。

(『日本全河川ルーツ大辞典』)